

デジタルアーカイブ“長良川の水文化”の観光情報としての構成の課題

瀬戸 敦子、林 知代 (岐阜女子大学)

1. デジタルアーカイブの本質と観光情報に求められる主観的な視点

地域資源に関するデジタルアーカイブなど、さまざまな対象がデジタルアーカイブで保管され、検索できる時代となっている。一方で、デジタルアーカイブの利活用の一つに、観光情報として既存のデジタルアーカイブを使えないかという議論が起こっている。デジタルアーカイブは、ありのままの事実を保管することが本質であり、あくまでも客観的な情報が求められる。それは4W1Rの「何が」「どこで」「誰が」「いつ」、そして著作権やプライバシーの権利でメタデータが構成される。

観光情報は、観光客がその場所に行きたいと思わせるいわゆる観光動機を誘発する情報と観光価値を高めるために必要な情報とにわけることができる。また、客観的な情報のみならずその情報には主観的な視点を補充する必要がある。この主観的な視点が、観光的要素＝魅力、価値となる。デジタルアーカイブに観光的要素を盛り込んだ情報を補充した観光用デジタルアーカイブには、4W1Rではなく、5W2H1Rの「何が」「どこで」「誰が」「いつ」「なぜ」、「どのように」「いくら」、権利でメタデータを構成することが必要である。加えて、ここには“For Who”「誰のために」でデータ管理をする。この考えは、一方的に情報を伝達するのではなく、情報を伝える側と受ける側双方間で投げかけられる情報であり、受ける側の興味・嗜好によって伝える情報を転換していくことが求められる。

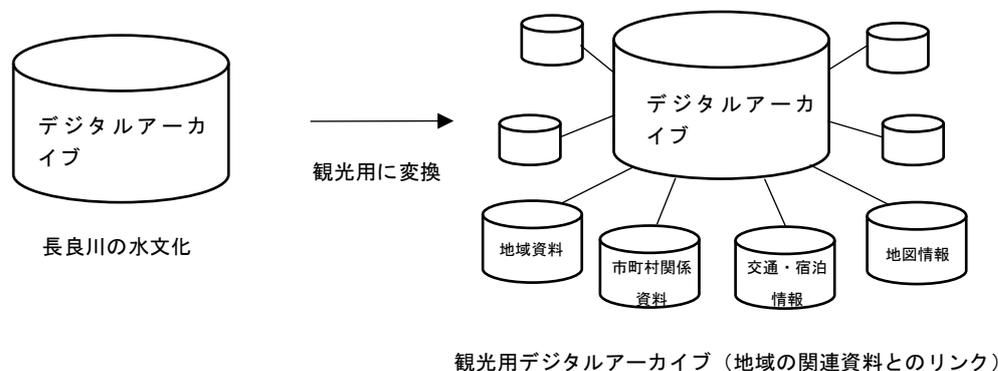


図-1 デジタルアーカイブを活用した観光用デジタルアーカイブ

2. デジタルアーカイブ“長良川の水文化”を観光に活用する上で考えられる課題



長良川の水文化に関して、既存のデジタルアーカイブを転換して観光用デジタルアーカイブを制作する上で、以下の課題が考えられる。

- ①何が観光の促進に必要な情報なのか。
- ②何を主観的観光として含めるのか。誰が決めるのか。
- ③誰に向けた情報コンテンツにするのか。
- ④視覚的にアプローチする場合、どのような写真、動画が魅力的なのか。
- ⑤誰にでも見やすく、分かりやすい表示・構成方法とは何か。
- ⑥流動的な情報（宿泊施設、観光施設情報等）をどのようにつなぎ合わせて表示していくか。

一つ例にとってみると、長良川沿いの温泉情報には、地図、周辺地理情報が掲載される。しかし、観光用デジタルアーカイブとして利活用するには、温泉から見える景色・風景の写真や各温泉の特徴（成分、温泉施設、歴史など）、交通情報も必要となる。見やすく、分かりやすい表示・構成を考えれば、文字フォント、文字の大きさ、色彩なども考慮する必要がある。

2. 観光用デジタルアーカイブと知の増殖型サイクル

「沖縄おうらい」では、観光・修学旅行等で活用された結果がフィードバック（還元情報）され、更なる改善が進められている。デジタルアーカイブ“長良川の水文化”に関しても、今後の利活用として観光の立場から必要とされる情報（観光要素）の資料の数を増やし、デジタルアーカイブ利用者からのフィードバックを受け改善することにより、新たな魅力を増した情報として提供することができる。

また、フィードバック（還元情報）の収集の方法、評価、改善の処理システムをどのように構築するかが大きな課題である。また、観光用のデジタルアーカイブとして、今後参加型（観光者からの資料の提供）のデジタルアーカイブの開発も検討すべき課題である。